

黄耆による薬疹の一例

近畿大学・医学部・皮膚科学教室

○野田剛弘, 山田秀和, 弓立達夫, 杉原和子, 福井 憲, 手塚 正

【目的】正常人, アトピー性皮膚炎(以下ADとする)患者に黄耆のパッチテストを行い, 今回経験した症例が, 黄耆による薬疹かどうかを検討するため

【方法】黄耆を白色ワセリンで1, 5, 10, 20%に希釈したもの, および原末を正常人10名, AD患者10名にパッチテスト施行。48時間, 72時間にICDRG基準で判定した。

【結果】正常人10名, AD患者10名ともにパッチテストはすべて陰性であった。

【考察】26歳, 女性。アトピー性皮膚炎患者にツムラ補中益気湯 投与。翌日より顔面の発赤腫脹, 手指の腫脹が出現したが, 内服中止後, 症状の軽減をみた。約1カ月後, ツムラ当帰飲子 を投与。翌々日より四肢の浮腫と皮疹の増悪, 乏尿, 好酸球増多(60%)を認めた。そのため補中益気湯, 当帰飲子および2剤の共通成分である甘草, 当帰, 黄耆のパッチテストを施行したところ, 補中益気湯, 当帰飲子, 黄耆にICDRG基準で48, 72時間に陽性を認めた。DLSTの結果は陰性なるも, 症状の経過および今回施行した正常人, AD患者に対する黄耆のパッチテストの結果を加味し, 黄耆による薬疹(紅皮症型)と考えた。黄耆は多数の方剤に使用されるものの, 皮膚科的な副作用報告例は調べ得た限り1例のみであり, 本症例は比較的稀な症例と考え報告した。

【考察】自然経過と考えている症例の中には, このような例が存在する可能性もあり, 今後黄耆を始め, 漢方製剤の使用には注意を要するものと思われた。

今田屋 章: 慢性関節リウマチの和漢薬治療, 富山医薬大医誌, 5(1): 34-39, 1992

ヒキノ ヒロシ: 黄耆の薬理, 漢方医学, 11(3): 31-37, 1987

黄耆, 漢薬の臨床応用(広州 中山医学院編, 神戸中医学研究会訳・編), 第1版, 医歯薬出版: pp.308-311, 1979